

継承的アーカイブの活用と「次世代の平和教育」(2)[†] ー長崎市立山里小・城山小の実践を事例としてー

外池 智*

秋田大学教育文化学部

本研究は、2009年度から推進している戦争遺跡に関する研究¹、2012年度から推進している戦争体験「語り」の継承に関する研究²の継続研究であり、2015年度から取り組んでいる継承的アーカイブを活用した「次世代の平和教育」の展開に関する研究³の一端を発表するものである。

戦後71年の歳月が経ち、戦争体験を語れる終戦時の年齢を仮に10歳とすれば、もはやその人口は全人口の8%となった。こうした状況の中、直接的な戦争体験の「語り」ではなく、継承的アーカイブを活用したいわば「次世代の平和教育⁴」と呼ぶべき実践が、刻々と展開されている。

こうした現況を踏まえ、ここでは特に「次世代の平和教育」について、1984（昭和59）年度から取り組まれている長崎市教育委員会による「平和教育研究校の指定」を取り上げ、2015-2016（平成27-28）年度指定校の山里小学校、そして2014-2015（平成26-27）年度グループ指定の城山小学校を取り上げ検討していきたい。

キーワード：「次世代の平和教育」、山里小学校、城山小学校

1. 長崎市教育委員会による平和教育への取り組み

現在、長崎市教育委員会では、平和教育について資料1に掲げた項目に取り組んでいる。大きくは、「1. 各教科・道徳・特活・総合的な学習の時間における指導」「2. 原爆被爆都市としての特殊性を生かした指導」「3. 教職員への研修」の3つである。

この内、本研究では「3. 教職員への研修」の「(4) 平和教育研究校の指定（昭和59年度より）」の事業で、2015-2016（平成27-28）年度に指定を受けた山里小学校、2014-2015（平成26-27）年度にグループ指定⁵を受けた城山小学校を取り上げ検討していきたい。

なお、例えば広島市では、2011（平成23）年より2013（平成25）年の3年間にわたり「広島市立学校

『平和教育プログラム』の作成・実行のプロジェクトに取り組んできた⁶。このプロジェクトでは、カリキュラム開発、教材開発、そしてモデルとなる授業実践の提起といった成果を上げており、2013（平成25）年度から広島市内の全部の小・中・高・特支での実践が既に取り組まれている。現在、実施されている「平和教育」の教員研修も、基本的にはこのプロジェクトの継続的展開として実施されている。一方の長崎市の場合は、1984（昭和59）年度から研究校を指定する方法を継続しており、対照的である。

2. 長崎市立山里小学校における平和教育

(1) 研究主題と目標

長崎市において、爆心地に最も近い小学校は城山小学校であり、次いで山里小学校である。山里小学校は、爆心地から北方約600mの地点にあり、人員の被害は、当日の在校生32人のうち、校長以下職員26人、用務員2人が死亡し、生存者はわずか4人であった。原爆投下当日、児童は登校していなかった

2017年1月4日受理

[†]Leveraging inherit an archive and peace education of the next generation (2) -Nagasaki municipal Yamazato elementary, Shiroyama elementary practices as case-

*Satoshi TONOIKE, Faculty of Education and Human Studies, Akita University

資料1 長崎市教育委員会による平和教育の取り組み

1.各教科・道徳・特活・総合的な学習の時間における指導 平和教育が教育課程全般にわたって実施されるべきものであることを踏まえ、各教科・領域等における具体的な取り扱いについて明らかにしてきた。	(1) 平和教育指導資料の作成（昭和53年度より）	各教科・道徳・特活・総合的な学習の時間における平和学習の具体的な指導の指針として、それぞれの各教科・領域等における取り扱いや各学校の実践事例等を中心に平和教育指導資料を編纂し、すべての教職員へ配布している。
	(2) 指導計画書への位置づけ（昭和55年度より）	それぞれの指導内容において、平和の資質との関連を明確にし、市教委編集の指導計画書に位置づけることで、全教育課程をとおして具体的な指導の実現を図り、平和に関する資質の基盤づくりに努めている。
2.原爆被爆都市としての特殊性を生かした指導 本市の原爆被爆都市としての特殊性を積極的に生かす方向で様々な事業を展開し、原爆被爆や戦争の実相の継承と、戦争のおろかさや平和の尊さに対する子どもたちの認識を深めるよう努めてきた。	(1) 全校登校日（8月9日）の設定	昭和46年度より、8月9日を全校登校日として設定し、各小・中学校で、「平和祈念式」「平和集会」等を実施し、原爆犠牲者の意識と原爆被爆の実相の継承に努めている。なお、平成7年3月、条例により「ながさき平和の日」と定めた。
	(2) 原爆資料館等見学学習	市内の小学校5年生を対象として、昭和57年度より原爆資料館学習を実施。平成9年度からは、原爆資料館の改築を機に、被爆建造物等祈念碑巡りを含む一日学習へと発展させた。
	(3) 原爆被爆パネル写真巡回展	中学校を対象とした取組として、昭和62年度より、原爆被爆パネル写真巡回展を実施。平成10年度、20枚組2セットの被爆パネル写真を増刷し、その充実を図る。
	(4) 被爆体験講話	平成7年度より、被爆体験講話を実施し、市内すべての小・中学校で毎年1回、継承部会員・地域住民・教員等による講話を聞く会を開催している。
3.教職員への研修 年々、戦後世代の教職員が増えている現状を踏まえ、教職員対象の研修の充実を図るよう努めてきた。	(1) 平和教育研修会（平成5年度より）	管理職と担当者を対象として、各小・中学校の平和教育の実践について発表・協議することによって、平和教育の在り方の充実に努めている。また、全体会の中に被爆体験講話を位置づけ、原爆被爆や戦争の実相の継承に努めている。
	(2) 平和教育講演会（平成8年度より）	世界的な視野で平和を考える研修の機会を設定し、教職員の平和に関する資質の向上を図るため、全教職員を対象として講演会を実施している。これまでに大学教授や研究者、平和推進協会継承部会員（語り部）などを講師として実施している。
	(3) 初任者への平和教育研修会（平成8年度より）	初任者研修の一環として、平和教育の講座を設定し、その中で、本市の平和教育の在り方についての講義、被爆体験講話などを実施することで、初任者の原爆被爆や戦争の実相に対する認識を深め、初任者の平和教育の資質の向上を図っている。
	(4) 平和教育研究校の指定（昭和59年度より）	小学校1校、中学校1校の組み合わせで2年間の研究を指定し、各学校の実態に即した平和教育の在り方について、継続的・実践的な研究を推進している。また、指定2年目には校外発表を行い、研究の成果が他の学校へも広がるよう努めている。

・長崎市教育委員会HP（<http://www.city.nagasaki.lg.jp/kosodate/520000/523000/p001708.htm>）2016.6.9閲覧より作成
・配列を整理してあるが、文章は原文のままである。

が、自宅で爆傷死あるいは火傷死したものが極めて多く、本校在籍児童数1581人のうち、約1300人が死亡したと推定されている⁷。

こうした山里小学校は、戦後70年に当たる昨年度と今年度にわたり、長崎市教育委員会から平和教育の研究指定を受けている。

研究主題は、以下の通りである。

被爆体験を継承し、平和を願う児童の育成をめざして～直接的平和教育における平和学習を通して～⁸

まず、「被爆体験の継承」と「直接的平和教育」という二つのキーワードが注目される。前者は、やはり戦後70年という事、さらに山里小学校は爆心地に近接する被爆校であり、その特別な立地を「被爆校の使命」と捉えての表現であり、後者も資料2に示した通り、基本的にはこうした「被爆体験の継承」を中心的 content としたものである。

さらに、この「被爆体験の継承」という課題は、以下に示した様に「平和教育の目標」にも盛り込まれている。

○平和教育目標

教科、道徳、特別活動、総合的な学習の時間など、それぞれの領域での実践の充実一層図るとともに、被爆校という本校の特殊性に根ざした被爆体験の継承を進め、児童の平和愛の心、国際協調の精神を育てる⁹。

波線部は追加された文言である。これについて、『研究紀要』には以下のように記されている。

本校の職員は、被爆体験の継承を中心に平和教育を進めたいという強い使命感を持っている。その「被爆体験の継承」を平和教育の中心とする方向性は、被爆後70年の時が経っても何らぶれることはないことを職員間で共通理解した¹⁰。

やはり爆心地に近接し、学校そのものの被爆といった他にはない特色が「被爆体験の継承」といった文言で明示されている事がわかる。

(2) 推進の構想図

次に、こうした研究主題、教育目標に基づいた平和教育推進の構想を取り上げたい。山里小学校では

「本校平和教育推進の構想図」として、資料2の様に示している。

研究主題に掲げられている「直接的平和教育」と、さらに対になる「間接的平和教育」の文言が注目されるが、まずその上位に位置付けられている「平和を求める心を自らの生活に生かす（行動目標）」について触れたい。実はこの6点は元来長崎市が掲げる「平和教育の基本3原則¹¹」の第2に掲げられている「平和に関する資質¹²」と同じものである。すなわち、山里小学校の今回の研究は、長崎市が取り組んでいる従来の平和教育を、基本的に踏襲したものであることが指摘できる。

さて、「直接的平和教育」と「間接的平和教育」の内容を比較すると、前者は特設された教育活動であり、後者は基本的に学校の各教育活動の領域に当たるものである事が分かる。特に、「直接的平和教育」については、『直接的平和教育』の内容を『被爆体験の継承』に焦点化した。ここに被爆校としての本校の独自性がある」と言う様に、特に「被爆体験の継承」に力点を置いた教育活動を掲げている。「直接的平和教育」は「被爆体験の継承」であると明確に位置付けたところに山里小学校の特色がある。

(3) 学習方法の工夫

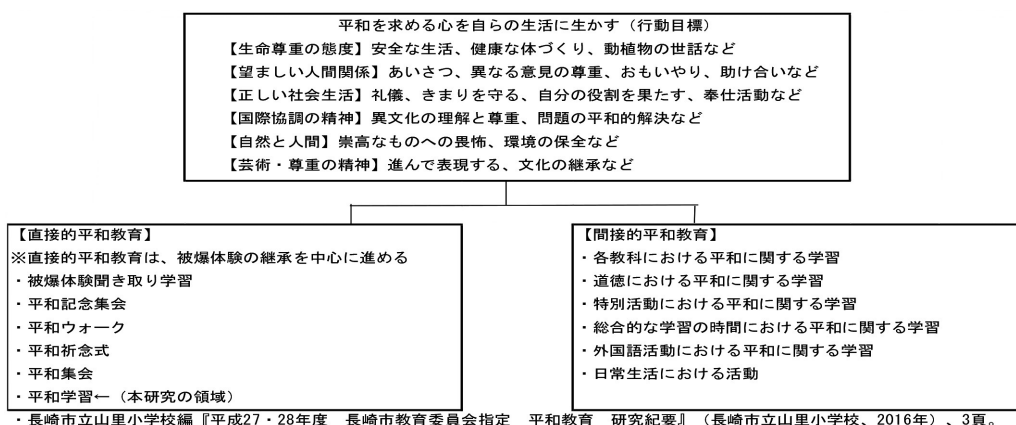
また、その学習方法にも山里小学校の特色が見出せる。山里小学校では、平和教育を推進するにあたって、元々5段階の学習の進め方を設定していたが、それを3段階に修正し示している。資料3参照。

こうした学習方法を段階論で比較してみたい。例えば、「考える日本史の授業」を提起している加藤公明は、歴史認識として「事実認識」「関係認識」「全体（本質）認識」の三段階を示している¹³。また、安達喜彦は平和教育について「感性的認識」「科学的認識」「実践的認識」の三段階を示している¹⁴。さらに、先述した広島市の「平和教育プログラム」では、資料4に示したように、「学習1～3」を全て「気づき・理解」→「思考」→「表現」の順で配列している¹⁵。こうした先行研究と比較すると、山里小学校の「理解」→「思考」→「表現」の三つのプロセスは、基本的にこの広島市「平和教育プログラム」のものと同様である事が分かる。

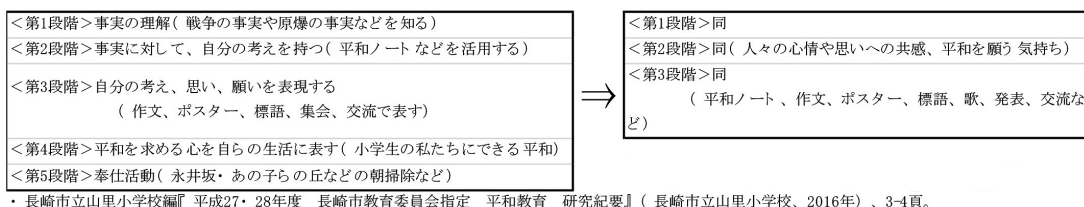
(4) 「直接的平和教育指導計画」の検討

これらを踏まえ、実際にどのようなカリキュラムが組まれたのであろうか。山里小学校では、「直接

資料2 長崎市長崎市立山里小学校における平和教育推進の構想図



資料3 長崎市長崎市立山里小学校の平和教育の学習方法



的平和教育」と「間接的平和教育」について、それぞれ「直接的平和教育指導計画」と「間接的平和教育にかかわる単元の例」を作成している。まず、前者を取り上げ、内容構成、「事実の理解」の配列、「自分の考えを持つ」、表現の多様化の4点から検討したい。「直接的平和教育指導計画」は、資料5の通りである。

まず内容構成について、先述した資料2にも示した通り、「直接的平和教育」の具体的内容は、「行事・集会」としての5つの教育活動（「被爆体験聞き取り学習（6月）」、「平和記念集会（8月9日）」「平和ウォーク（10月）」「平和祈念式（11月）」「平和集会（2月）」）と「平和学習」で組織されている。この内、「平和学習」の内容は、資料5に示した様に、1・2

年生では生活科が、3～6年生では総合的な学習の時間が中心を占めている事が分かる。ここで注意したいのは、「間接的平和教育」との違いである。資料2にも示した様に、「間接的平和教育」は基本的にいわゆる各領域に当たる教育活動として展開されている。では、同じ生活科や総合的な学習の時間でも「直接的平和教育」におけるそれと、「間接的平和教育」におけるそれとではどう違うのであろうか。研究主任の勝木弘昭教諭によれば、「直接的平和教育」における生活科や総合的な学習の時間では、その教科や領域の目標に沿った目標と平和教育の目標と二重に目標を設定する事で、「間接的平和教育」との差別化を図っていると言う¹⁶。例えば、筆者が直接参観させていただいた2年生の生活科の授業

資料4 広島市「平和教育プログラム」の「学習1～3の流れ」

	小学校1・2・3年	小学校4・5・6年	中学校	高等学校
学習1	気付く	気付く	知る	情報整理
学習2	考える	考える	思考する	思考・探求
学習3	伝える	発信する	発信する	発信

・広島市教育委員会学校教育部指導第二課編「広島市立学校『平和教育プログラム』指導資料」（広島市教育委員会学校教育部指導第二課広島市教育委員会学校教育部指導第二課、2014年3月）、8頁より抜粋。

資料5 長崎市立山里小学校「直接的平和教育指導計画」

単元	行事・集会	1年生	2年生	3年生	4年生	5年生	6年生
		被爆体験聞き取り 学習（6月） 平和記念集会（8月9日） 平和ウォーク（10月） 平和祈念式（11月） 平和集会（2月）					
平和学習		音楽1h（1）： 「『あの子』の歌を歌おう」 生活4h（2）： 「あの子らの碑について知ろう」	生活1h（1）： 「永井桜について知ろう」 生活4h（2）： 「原爆資料室について知ろう」	総合23h（1）： 「山里小の平和遺構を調べよう」 総合23h（2）： 「学校のまわりの平和遺構を調べよう」	総合30h（2）： 「人のために生きる～永井博士」 総合23h（2）： 「学校のまわりの平和遺構を調べよう」	総合14h（1）： 「平和の思いを深めよう」 総合12h（2）： 「平和の思いを発信しよう」 総合3h（3）： 「平和の思いをつなげよう」	総合7h（1）： 「平和の思いを広げよう」 総合1h 音楽2h（1）： 歌「あの子」 総合7h（1～2）： 「平和の思いを広げようⅡ」
第1段階 事実の理解	目標	・8月9日に原爆が投下され、本校でも多くの犠牲者ができたことを理解することができる。 ・本校には被爆した児童を慰霊するための歌や遺構があることに気づくことができる。	・本校にはいくつかの平和遺構があり、本校児童や地域の人々はその遺構を大切にしていることに気づくことができる。 ・被爆の実態を伝えるために努力している人があることに気づくことができる。	・11時2分に原子爆弾が投下され、本校では1300人以上の犠牲者がでたことを理解することができる。 ・校内の平和遺構について理解を深め、それらの遺構を守り続けている人々がいることを理解することができる。 ・学校周辺にも多くの平和遺構があること、それらの遺構を守り続けている人々がいることを理解することができる。	・本校の平和教育の礎を築いた永井博士の活動を理解し、その意思を引き継いでいる人々がいることを理解することができる。	・原子爆弾の3つの威力や長崎市では7万人を超える犠牲者がでたことを理解することができる。 ・長崎市は被爆の実態を伝えるために、原爆資料館を中心に広く発信していることを理解することができる。 ・原爆資料館が発信している被爆の実態についておおまかに理解することができる。	・平和を願う人々が様々な形で平和活動を行っていることを理解することができる。 ・学校周辺の平和遺構について理解を深めることができる。
第2段階 自分の考えを持つ	目標	・原爆被害者の苦しみや気持ちに共感できる。 ・平和遺構を残した人々、それを守り続けている人々の思いに共感できる。 ・原爆はおそろしいもので、二度とおきてほしくないという思いをもつことができる。	・原爆被害者の苦しみや気持ちに共感できる。 ・平和遺構を残した人々、それを守り続けている人々の思いに共感できる。 ・平和を守るためには、被爆の実態を学んでいかなければならないという思いをもつことができる。	・原爆被害者の苦しみや気持ちに共感できる。 ・平和遺構を残した人々、それを守り続けている人々の思いに共感できる。 ・平和を守るためには、被爆の実態を学んでいかなければならないという思いをもつことができる。	・原爆被害者の苦しみや気持ちに共感できる。 ・平和遺構を残した人々、それを守り続けている人々の思いに共感できる。 ・地球から核兵器をなくすためには、自分が学んだことを多くの人に伝えていかなければならないという思いをもつことができる。	・原爆被害者の苦しみや気持ちに共感できる。 ・平和遺構を残した人々、平和運動に携わっている人々の思いに共感できる。 ・地球上から核兵器をなくすためには、自分が学んだことを多くの人に伝えていかなければならないという思いをもつことができる。	・平和を願う人々が様々な形で平和活動を行っていることを理解することができる。 ・学校周辺の平和遺構について理解を深めることができる。
第3段階 自分の考え・思い・願いを表現する	目標	学習してわかったこと、感じたことを平和ノート・ポスター、歌などで表現できる。	学習してわかったこと、感じたことを平和ノート・ポスター、歌、標語・新聞・紙芝居などで表現できる。	学習してわかったこと、感じたことを平和ノート・ポスター、歌、標語・新聞・紙芝居などで表現できる。	学習してわかったこと、感じたことを平和ウォーク・平和ノート・ポスター、歌、標語、音楽、新聞、紙芝居案内、掲示板、パンフレットなどで表現できる。	学習してわかったこと、感じたことを平和ウォーク・平和ノート・ポスター、歌、標語、音楽、新聞、紙芝居案内、掲示板、パンフレットなどで表現できる。	学習してわかったこと、感じたことを平和ウォーク・平和ノート・ポスター、歌、標語、音楽、新聞、紙芝居案内、掲示板、パンフレットなどで表現できる。
		対象	同級生・家族 地域の人々	同級生・家族 地域の人々	同級生・家族 地域の人々	同級生・家族 地域の人々	下級生・来校者（修学旅行生など）

・長崎市立山里小学校編『平成27・28年度 長崎市教育委員会指定 平和教育研究紀要』（長崎市立山里小学校、2016）、28頁。
・「平和学習」の一部を整理している。

(単元名「わたしの町はっけん」(小単元名「げんばくしりょうしつについて知ろう」))では、以下の様に二重に目標が設定されていた¹⁷⁾。

- 原爆資料室の見学や、平和案内人の話を通して、展示資料の意味やそこにいる案内人の役割に気付くことができる。
- 展示資料を通して被爆の実相を実感したり、平和案内人の平和への思いに触れたりすることで、自分なりの平和への思いや願いをもつことができる。

前段が生活科に沿った目標であり、「気付き」を目標に設定している。一方、後段では「自分なりの平和への思いや願いをもつことができる」というように、平和教育に沿った目標設定がなされている事が分かる。一方の「間接的平和教育」では、平和教育にかかわる目標設定はなされず、平和教育的内容は、その都度関わる部分で随時展開されるようになっていく。

次に、第1段階の「事実の理解」の配列について取り上げたい。先述した様に、「学習方法」として、「＜第1段階＞事実の理解」→「＜第2段階＞事実に対して、自分の考えを持つ」→「＜第3段階＞自分の考え、思い、願いを表明する」の三段階を示していた。この内の、まず「＜第1段階＞事実の理解」である。指摘したいのは2点、すなわち「事実認識」の二重構造と学習材配列の同心円的拡大である。まず前者について、資料5に示した通り、「事実の理解」においては、各学年とも原爆投下そのものへの事実認識と、その後に残された平和遺構や平和希求活動への事実認識の二重の目標設定になっている事が分かる。とりわけ、原爆投下といった事実認識のみならず、全ての学年でその後の平和希求活動を取り上げている点には注目したい。例えば、2年生では「本校にはいくつかの平和遺構があり、本校児童や地域の人々はその遺構を大切にしている事に気づく事ができる」、3年生では「学校周辺にも多くの平和遺構がある事、それらの遺構を守り続けている人がいる事を理解する事ができる」、6年生では「平和を願う人々が様々な形で平和活動を行っている事を理解する事ができる」等である。既に筆者は、「次世代の平和教育」の特色として、「(1) 継承的アーカイブの活用」「(2) 戦後の平和希求活動への着眼」「(3) 目的平和教育から方法的平和教育へ」を示してい

るが(註4)、この山里小学校においても、「事実の理解」の内容において「(2) 戦後の平和希求活動への着眼」が見受けられる事が分かる。次に、学習材の配列についての特色である。資料5の通り、学年が上がる毎にその配列は同心円的に拡大している事が分かる。例えば、低学年では校内の遺構、中学年では学校周辺の遺構、そして高学年では原爆資料館を代表とする市内の遺構である。基本的には、小学校社会科の伝統的教材配列と同じである。

次に、第2段階の「自分の考えを持つ」について取り上げたい。注目されるのは、全ての学年を通じて、「原爆被害者の苦しみや気持ちに共感できる」「平和遺構を残した人々、それを守り続けている人々の思いに共感できる」と言う様に、共感的理解を求めている点である。本来、この第2段階は「思考」の段階であるので、子どもたち自身がどのような考えを持つのかを示す必要がある。しかし、「直接的平和教育指導計画」では「共感」に重きが置かれているのである。具体的に、各学年でどのような思考力を育てようとするのかを明示する必要がある。また、その対象は、第1段階と同じく、被爆者本人とその後の平和希求活動にかかわった人々への二重構造になっている事が分かる。

最後に、第3段階の「自分の考え・思い・願いを表現する」について取り上げる。ここでは、学年が進むにしたがって、表現方法、表現対象それぞれが多様化しているのが分かる。表現方法では、低学年では「平和ノート・ポスター・歌など」と3点、中学年では「平和ノート・ポスター・歌・標語・新聞・紙芝居など」と6点、高学年ではさらに「平和ウォーク・平和ノート・ポスター・歌・標語・音楽・新聞・紙芝居案内・掲示板・パンフレットなど」と10点である。また、その表現対象も、低学年では「同級生・家族」、中学年ではそこに地域の人々が加わり、さらに高学年ではそこに「下級生・来校者(修学旅行生など)」が加わっている。これらの多様化は、それぞれの教育活動に組織的に位置付けられている。

(5) 実際の授業実践―第2学年生活科―

では、実際の授業実践では、どの様に展開されているのだろうか。ここでは、昨年9月21日(水)2校時に、第2学年で実施された生活科の授業で、単元名は「わたしの町はっけん」、小単元名は

「げんぱくしりょうしつについて知ろう」を紹介したい。授業者は岩永祥子教諭で、この山里小学校の卒業生である。長崎市での研究授業の本番を前に、筆者の訪問に合わせて見せていただいた授業である。指導案は紙面の都合上省略する。

実際に授業を拝見させていただいた授業で、筆者が気付いた成果と課題は以下の通りである。



まず成果について、発表、表現の工夫を指摘したい。本実践は、「学習方法」で取り上げたように、「＜第1段階＞事実の理解」→「＜第2段階＞事実に対して、自分の考えを持つ」→「＜第3段階＞自分の考え、思い、願いを表明する」の三段階の内、「＜第3段階＞自分の考え、思い、願いを表明する」に位置付く授業である。したがって、「本時の目標」も「原爆資料室見学や平和案内人の話を通して気づいたことや分かったこと、思ったことを、ワークシートをもとに友達に伝えるように発表することができる」とあるように、表現力の育成に重点を置き設定されている。実際の授業では、発表の仕方を「気づいた事」→「思った事」と整理して発表させていた点が工夫されていた。すなわち、まず子ども達は、

実際に校内にある原爆資料室を訪れた際の気付きを発表し、次にその気付きについて自身が思った事を発表するのである。全員が自由にばらばらに発表するのではなく、発表の仕方を統一し、一貫性のある発表ができるように工夫していた。また、その発表した個々の「気付き」に対しても、必ずパワーポイントでその気付きの写真を示し、実証的に跡付けていた事も指摘しておきたい。

しかし、実践された事で明らかになる課題もある。筆者は、気付きの深まりとその類型についての2点を指摘したい。まず、気付きの深まりについて、生活科では特に現行の指導要領で重視されている点である。今回の授業では、子ども達が実際に原爆資料室を訪れ、そこで気付いた点を次々に多様に発表していた。しかし、その気付きからさらに次の段階への気付き、あるいは一つの気付きから他に連関する気付きなど、気付きの深まりに対する工夫は見受けられなかった。次に、気付きの類型についてである。原爆資料室を訪れた際の気付きの類型化について、「①ひばくしたかわら、とけたガラス」「②ひばくした山里小」「③げんぱくのきのこぐも」「④ほう空ずきん」「⑤ほう空ごう」「⑥へいわあんない人さん」の6つが示されていたが、これが場当たり的な感が否めなかった。実際の原爆資料室では、当然その展示は体系的に整理されている。それに沿った形で類型化を示した方が、まさに体系的な「事実の理解」に沿った気付きを発表できたのではないだろうか。

(6)「間接的平和教育にかかわる単元の例」の検討

次に、「直接的平和教育」と対になる「間接的平和教育」を取り上げ検討してみたい。山里小学校では、「間接的平和教育にかかわる単元の例」として以下の資料6の表を示している。

「単元の例」として示されているが、実際に各学年でこれに沿って実施されている¹⁸。前述した「本校平和教育推進の構想図」では、「各教科における平和に関する学習」と示されているが、実際は教科にかなり偏りがある事が指摘できる。すなわち、図工科、国語科、生活科、社会科が中心にかかわる教科であり、その内容にも、例えば図工科では全学年で取り上げられてはいるものの、6月の「平和ポスター」の単元のみである。それに対して、道徳では一年間を通して各学年ともほぼまんべんなく関係する単元が配置されている事が分かる。

資料 6 長崎市立山里小学校「間接的平和教育にかかわる単元の例」

	1年生	2年生	3年生	4年生	5年生	6年生
教科	図工科 6月「平和ポスター」	図工科 6月「平和ポスター」	図工科 6月「平和ポスター」	図工科 6月「平和ポスター」	図工科 6月「平和ポスター」	図工科 6月「平和ポスター」
	国語科 7月「平和標語」	国語科 7月「平和標語」	国語科 7月「平和標語」 10月「ちいちゃんのかげおくり」	国語科 6月「一つの花」 7月「平和標語」	国語科 7月「平和標語」 7月「生命のつながり」	国語科 7月「平和標語」 9月「未来がよくあるために」
	生活科 5月「はなやさいをそだてよう」 9月「いきものとなかよし」 12月「かぞくといっしょにおしょうがつ」 3月「もうすぐ2年生」	生活科 5-7月「はなやさいをそだてよう」 6月「春の町ではっけん」 9-10月「町にははっけんがいっぱい」 1-2月「はっけん自分のよいところ」	社会科 4月「学校のまわりをたんけんしよう」 6月「長崎市をたんけんしよう」	社会科 12月「市の発展に尽くした人」	社会科 1月「環境とわたしたちのくらし」	社会科 10月「国力の充実をめざす日本と国際協力」 11月「アジア・太平洋に広がる戦争」 12月「新しい日本へのあゆみ」 1月「わたしたちのくらしと憲法」 2月「日本とつながりのある深い国々」 3月「国際連合のはたらきと日本人の役割」
			理科 4-10月「植物をそだてよう」			
道徳	4月「たのしいがっこう」 5月「おてつだい」 9月「はしのうえのおおきみ」 10月「あきがおのかんさつ」 12月「にわのことり」 2月「みみずくとおつきさま」 2月「いのちがあってよかった」	6月「ハムスター」 6月「おぼけ学校のきまり」 9月「おじさんのてがみ」 10月「いただきます」 2月「森のけいじばん」 3月「たんじょう日」	4月「自転車置き場があるのに」 6月「私はお姉ちゃん」 9月「健ちゃんを助ける」 10月「水飲み場」 2月「ヒキガエルとロボ」 3月「ペロとさんぽ」	6月「精霊流し」 6月「和菓子屋さん写真」 10月「見えない名札」 10月「雨のバス停留所」 11月「あなたがもつ生きる力」 2月「バングラデシュから来たシャボン貝」 2月「けんじのわすれ物」 2月「不思議の不思議」	4月「父の言葉」 5月「すれちがい」 6月「コロナのかがやき」 7月「いのちの重さ」 9月「百シヤアのふたごしまい」 10月「言葉のおくりもの」 11月「命がないと始まん」 12月「くずれ落ちた段ボール」 2月「その思いを受けつい」 3月「バトンをつなげ」	4月「屋久島の森で」 5月「車いすでの経験から」 6月「東京大空襲の中で」 7月「難民に思いを寄せて」 9月「やっぱり気になる」 10月「愛華さんからのメッセージ」 11月「心に通じた『どうぞ』のひとつこと」 11月「この手に命を受けて」 12月「海の勇者」 1月「空かんのゆくえ」 2月「おりづる」 3月「あこがれのパティシエ」
特別活動	人権集会	人権集会	人権集会	人権集会	人権集会	人権集会
外国語活動					L1 4月「Hello!	L5 10月「Let's go to Italy」

・長崎市立山里小学校編「平成27・28年度 長崎市教育局指定 平和教育研究紀要」（長崎市立山里小学校、2016）、29頁より作成。

3. 長崎市立城山小学校における平和教育

(1) 研究主題と目標

次に、長崎市立城山小学校を取り上げる。爆心地から西方約500mと最も爆心地に近い国民学校であった城山小学校は、当時学校にいた教職員31人の内28人が亡くなり、約1,500人の児童の内約1,400人が家庭で亡くなった。この他にも、三菱重工業株式会社長崎兵器製作所の一部が疎開して学校を使用していたため、その所員58人、挺身隊員12人、学徒報告隊員42人、庁務員3人の計115人が亡くなっている。生き残ったのは、わずか教員3人、家庭にあった児童約50人、三菱兵器製作所員9人、挺身隊員2人、学徒報告隊員4人であった¹⁹。

こうした城山小学校も、やはり長崎市教育委員会より2014-2015年度のグループ指定を受けている。城山小学校の研究主題は、以下の通りである²⁰。

平和的実践力を育む城山学習の創造

～総合的な学習の時間、道徳の時間を通して～

（自ら学び、対話し、自己の生き方を考える力を育てる指導法のあり方）

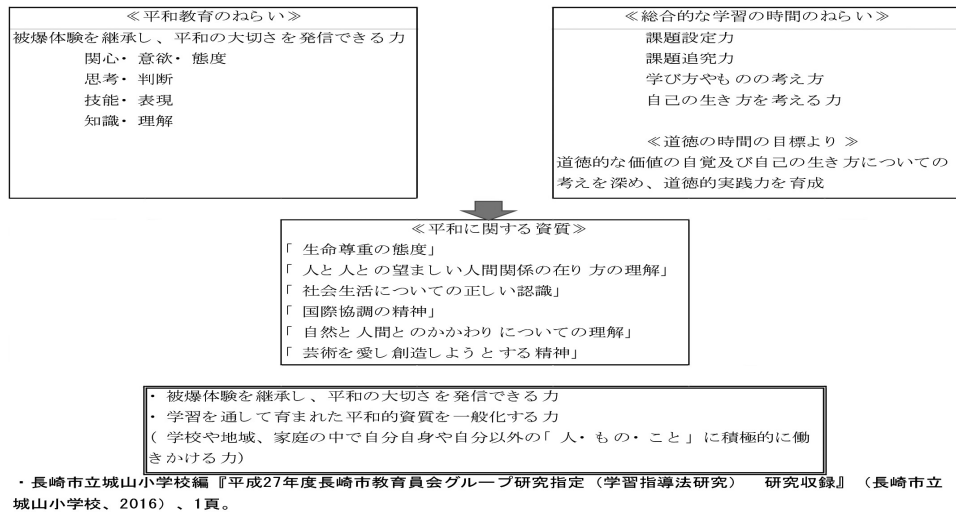
サブタイトルにあるように、本研究は教科教育で

はなく、当初から総合的な学習の時間と道徳を研究の重点として取り組まれた。メインタイトルで示されている「城山学習」とは、この総合的な学習の時間や道徳も含む城山小学校の平和学習の事である。

また、注目されるのは「平和的実践力」である。これについては、以下の資料7の構造図で示されている。結論的に示されているのは、下段で二重線に囲まれた2点である。やはり、被爆後70年の歳月を経て、被爆体験の継承が示されているとともに、先述した山里小学校の同じく「発信する力」が重視されている事が分かる。

また、二点目で示されている「平和的資質」は、《平和に関する資質》として6点で示されているが、これもまた、元来長崎市が掲げる「平和教育の基本3原則」の第2に掲げられている「平和に関する資質」と全く同じものである事がわかる。先述の通り、この城山小学校も山里小学校も爆心地に最も近い小学校であり、今日においても長崎市を代表する平和教育推進校であると言える。そして、その二校ともに、この被爆70年の節目にある平和教育実践においても、子ども達の身に付けるべき力として「平和に関する資質」を掲げているのである。この事は、やはり長崎市における平和教育実践の特色と

資料 7 長崎市立城山小学校における「平和的実践力」



資料 8 長崎市立城山小学校における「総合的な学習の時間における指導過程」

課題設定	①他教科、あるいは既習学習を想起させたり、具体的な「人・もの・こと」、具体的な資料（写真、グラフ、表、地図、実話など）、学校や地域、社会などの事実や現状を認識させる。（現状認識） ②その事実や現状に対して、問題を投げかける。 ③問題を提起されて、自分なりに追究したいこと、やってみたいことを課題にする。 ④課題を追究することで、事実や現状がどのようになるのか、根拠を意識させながら見通しをもたせ話し合う。 ⑤追究していく活動を計画させる。
課題追究	計画に沿って追究していく。 対話などを通して、学びを向上させていく。
表現・発信	追究してきたことを、表現（発信）する。
構築	既存の平和的資質と本学習で課題追究したことや学んだことを統合させ再構築する。自分の生き方を考える。

・長崎市立城山小学校編『平成27年度長崎市教育委員会グループ研究指定（学習指導法研究） 研究収録』（長崎市立城山小学校、2016）、5頁。

して指摘できる。

(2) 指導過程の工夫

城山小学校の場合は、「指導過程」の研究として総合的な学習の時間の指導過程を示している。対照的に、先述した様に、山里小学校の場合は「学習方法」として5段階を3段階に整理して示していた。前者は、「指導」であるので、教員側が如何に教え、指導していくかという視点であり、一方の后者は「学習」であるので、子ども達が如何に学ぶのかの視点となっている。

さて、城山小学校では、「総合的な学習の時間における指導過程」として、資料8を示している。4つのプロセスとして、「課題設定」→「課題追究」→「表現・発信」→「構築」を示している。先述し

た山里小学校の場合は「事実の理解」→「事実に対して、自分の考えを持つ」→「自分の考え、思い、願いを表現する」であった。注目したいは、山里小学校の場合は考えた後に「表現」させるのに対し、城山小学校の場合は、「表現・発信」した後に「構築」するプロセスとなっている点である。城山小学校の「構築」とは、資料8の通り、これまでの学習を振り返り「再構築」する事であり、「自分の生き方を考える」事である。学習した成果を、どのように次に繋げていくのかは重要な課題であるが、城山小学校の場合はそれを「構築」として位置付けているのである。

(3) 「総合的な学習の時間・平和学習活動」の検討
次に、これらを踏まえて構成された「平成27年度

城山小学校 総合的な学習の時間・平和学習活動」について検討したい。(資料9参照)

特色として、校内の被爆遺構・平和遺構の継承的活用、次に「平和的実践力」の内の「発信する力」の工夫、最後に継続的な地域と遺族の支えの3点を指摘したい。

まず、1点目の校内の被爆遺構・平和遺構の継承的活用について述べていきたい。城山小学校では、校内に残された実際の被爆の痕跡を「被爆遺構」、一方、戦後慰霊や平和祈念のために作られたモニュメントを「平和遺構」として区別している。前述したように、爆心地から西方約500mと最も爆心地に近い国民学校であった城山小学校は、当時学校にいた教職員31人の内28人が亡くなり、約1,500人の児童の内約1,400人が家庭で亡くなった。生き残ったのは、わずか教員3人、家庭にあった児童約50人であった。こうした悲惨な被害を今日に残す被爆遺構・平和遺構は、今日城山小学校内に14件にも上

り、その内旧城山国民学校校舎は国の登録文化財にも指定されている。また、今日でも毎日原爆投下時間の11時2分には「子らのみ魂よ」が流され²¹、外部からも年間400校、3～4万人の来校者があるという²²。さらに「嘉代子桜」は、長崎市内全小学校の夏休みの課題である「あじさいノート」にも取り上げられている²³。こうした豊富な平和教育の題材、学習環境を、城山小学校では伝統的継承的に活用してきており、今回の研究においてもそれが踏襲されている事が分かる。各学年で取り上げられている被爆遺構・平和遺構は以下の資料10の通りである。これら、1～6年生で取り上げられている被爆遺構・平和遺構は、基本的に発達段階に合わせて設定されている²⁴。

次に「平和的実践力」の内の「発信する力」の工夫についてである。基本的に、「平成27年度 城山小学校 総合的な学習の時間・平和学習活動」では、各学年とも資料8で示した「総合的な学習の時

資料9 「平成27年度 城山小学校 総合的な学習の時間・平和学習活動」

1学期					3学期						
	4月	5月	6月	7月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
1年	「へいわ」ってなあに～かよこさくらのおはなしかんがえよう～										
	○平和祈念式 つてなあに	○「子らの魂 よ」	○かよこ板につ いて ○平和ポスター ○被爆体験講話	○「ふりそでの 少女」 ○平和の願いを 決めよう						○平和ってなあ に	○平和学習発表会準備 ○発表会 ○振り返り
2年	少年平和像にこめられた平和の思いを伝えよう										
	○平和祈念式 について	○少年平和像に ついて知ろう	○命の大切さ ○平和人権ポス ター ○被爆体験講話	○平和標語 ○平和の願い	○「たえ子さんの筆」の紙芝居 ○少年平和像についての講話 ○少年平和像について伝えたいことを話し合う。					○自分たちができることに取り組む。 ○振り返りをする。 ○少年平和像にこめられた平和の思いを伝えよう ○平和学習発表会準備練習 ○発表	
					八木先生・保護者					修学旅行生・見学者 (ポスター、パンフレット)	
3年	「私たちの城山小学校を知ろう」(22h)				「ピースナビゲーターへのスタート」(2学期28h、3学期18h)						
	○双子ス・カラスザンショウ について知る。 ○校内の被爆遺構・平和遺構に ついて課題を持つ。	○校内の被爆遺構・平和遺構に ついて調べる。 ○6年生のピースナビで深める。	○校内の被爆遺構・平和遺構に ついて調べる。 ○6年生のピースナビで深める。	○城山周辺、原爆落下中心地を 散策し、当時の様子を知る。 ○講話を聞き、当時の様子につ いて理解を深める。 ○校内の被爆遺構・平和遺構に ついて課題を持ち調べる。	○城山周辺、原爆落下中心地を 散策し、当時の様子を知る。 ○講話を聞き、当時の様子につ いて理解を深める。 ○校内の被爆遺構・平和遺構に ついて課題を持ち調べる。	○2年生への発表会に向けて、 準備、練習を進める。 ○講話を聞き、被爆者の方の思 いを発表会へ生かす。 ○2年生への発表会、振り返り	○2年生への発表会に向けて、 準備、練習を進める。 ○講話を聞き、被爆者の方の思 いを発表会へ生かす。 ○2年生への発表会、振り返り	○2年生への発表会に向けて、 準備、練習を進める。 ○講話を聞き、被爆者の方の思 いを発表会へ生かす。 ○2年生への発表会、振り返り	○2年生への発表会に向けて、 準備、練習を進める。 ○講話を聞き、被爆者の方の思 いを発表会へ生かす。 ○2年生への発表会、振り返り	○2年生への発表会に向けて、 準備、練習を進める。 ○講話を聞き、被爆者の方の思 いを発表会へ生かす。 ○2年生への発表会、振り返り	○2年生への発表会に向けて、 準備、練習を進める。 ○講話を聞き、被爆者の方の思 いを発表会へ生かす。 ○2年生への発表会、振り返り
				6年生	ピースナビ・ナガサキ、平和発信協議会、2年生						4年生
4年生	「やさしさ発見! 福祉の心は 平和の心」				「永井博士の生き方」にふれよう～今、わたしたちにできること～」						
	○導入・講話(ボランティアの方より) ○アイスマスク・車いす・高齢者疑似体験 ○体験をまとめる。 ・計画、資料収集・調査、感想をまとめる、発表準備 ○発表・対話 ○振り返り 社会福祉協議会・出島交流館				○認知症サポーター養成講座～デイサービスセンター訪問 ○講話 永井記念館 ○課題設定 ○調査 方法(対話)計画 ○感想をまとめる					○発表準備 ○発表 ○実践に向けて ○対話	
5年生	長崎の原爆被害について知ろう(被爆校舎・原爆資料館)(18h)				「つなぐ～平和の思いを未来へ」(29h)						
	○城山小の被害について、被爆校舎に残る資料をもとに理解を深める。 ○城山小以外の長崎の被害や原子爆弾のことについて理解を深める。 平和発信協議会				○平和について知り、伝えていくための活動を実践する。 ・幼稚園や近隣小学校へ出向いての劇や紙芝居 ・城山小を題材としたピースさくくやクイズ ・ホームページやパンフレットを作成し、県外の人への平和発信等 平和発信協議会・被爆継承課・さくくガイドさん					「平和フェスタを開こう」(18h) ○「平和フェスタ」と銘打ち、平和発信協議会をはじめ保護者や地域の方々を招いて、自分たちの平和への思いを発信する。 ○ピースナビ「6年生との交流」 ○NHK放送体験クラブ 平和発信協議会・6年生	
6年生	平和発信協議会				平和発信協議会・被爆継承課・さくくガイドさん						
	「リーダーとして」 ○1年生との交流 ○自分たちの課題を決める ○プログラムや役割 ○発表準備 ○3年生へのピースナビ ○振り返り	「私たちのピースナビ活動を作ろう。」 ○自分たちの課題を決める ○プログラムや役割 ○発表準備 ○3年生へのピースナビ ○振り返り			「修学旅行に行こう」 ○準備 ○修学旅行 ○発表準備 ○平和発信協議会の方へ ○横田小・福江小・山田小・岡崎商業へのピースナビ活動 ○振り返り 平和発信協議会 横田小・福江小・山田小・岡崎商業・保護者	「平和の種まくピースナビ活動を作ろう」 ○発表準備 ○平和発信協議会の方へ ○横田小・福江小・山田小・岡崎商業へのピースナビ活動 ○振り返り 平和発信協議会 横田小・福江小・山田小・岡崎商業・保護者			「ありがとう城山」 ○5年生へのピースナビ ○イタリアとの交流 5年生・1～4年生 保護者など		

・長崎市立城山小学校編「平成27年度長崎市教育局グループ研究指定(学習指導法研究) 研究収録」(長崎市立城山小学校、2016)、17-21頁、29-33頁、46頁より作成。

資料10 長崎市立城山小学校における被爆遺構・平和遺構

名称	由来	対象学年	被爆遺構	平和遺構
①嘉代子桜	原爆降下時、校舎にいて亡くなった林嘉代子さんのお母さんである林津恵さんが、娘が好きだった桜の木を学校に寄贈され、それが大きくなったものです。夏休み運動場にあるオアシスであり、子どもたちにとっては格好の遊び場になっています。ここにある碑は昭和41年に建てられたものです。	1年生		○
②平和モニュメント	この記念碑「三つの願い」は、被爆50周年の前日の年に平和の誓いを新たにするために建立されたものです。デザインは、全校児童の発想を生かしたもので、三つの願いは、○大きな希望 ○広い心 ○深い愛 という願いが込められています。 その下の集は、平和を支える全人類の手であり、緑の自然を永久に残す意味が込められています。			○
③平和の鐘	嘉代子桜を寄贈された林津恵さんがなくなれた後の遺産により資金をいただき、鐘を作りました。上から見ると桜の花に見えるように設計されています。毎朝8時、12時、16時に鐘の音で奏で、毎月演奏される曲目が変わります。			○
④荒川平和桜	当時教頭をされていた荒川秀男先生は、校長室で会議中に被爆されましたが奇跡的に助かりました。生き残った子どもたちを集めて授業を再開したり、慰霊祭を開いたりと本校の復興と教育にご尽力いただきました。戦後、校長として城山小に戻り平和を願う教育の基礎を築かれました。平成5年、荒川先生のご遺族から桜を寄贈していただき、植樹・命名されたものです。			○
⑤少年平和像	戦争、原爆で全てを失った本校児童が、平和を希求して立ち上がる姿を象ったものです。制作者は、富永良雄氏で昭和26年8月8日に建立されました。 モデルの少年は当時5年生で、父母を原爆でなくしました。 台座の「平和」の文字は、当時6年生だった菅原耐子さんの書で、1年生のときに被爆しましたが、奇跡的に助かり、家族をまつてある仏壇に毎日参り、その前で練習をして書いたものです。	2年生		○
⑥永井坂	永井隆博士の「この子を残して」の印税から基金をいただき、植樹した桜の木があることから命名されました。昭和24年2月に寄贈された桜は、毎年春になるときれいな花のトンネルになり、見事です。	4年生		○
⑦被爆校舎（城山小平和祈念館）	被爆した旧校舎の跡で、被爆後も教室として使用しましたが、それまでの慰霊会、同窓会、青友会の保存運動が続き昭和59年の新校舎建設に当たり、一部が遺構として残され現在に至っています。原爆降下中心に近く、現存する被爆施設としてはとても貴重なものです。 児童の発案と慰霊会等の働きかけにより平成11年2月に改築され、城山小の新しい平和のシンボルとして生まれ変わりました。	5年生	○	
⑧被爆のクスの木(1)	運動場にある大ツアツツのそばにあるクスの木は、原爆で根本からふちぎられましたが、そこから芽を吹いて今のように大きく育ったものです。		○	
⑨原爆殉難者の碑	運動場の西側にあり、原爆で殉難された方々の冥福を祈り平和を祈念するために作られた碑です。原爆殉難者名簿を建ててあり、殉難者名簿を奉納してあります。 台座の左側の立体は遺族を、右側の低い立体は人類（児童、先生、父母、学校）を表し、ここに抱かれた中心の立体は殉難者を表しています。 後壁は、人類に恐怖と絶滅を迫る核の脅威と、核保有国の厚い壁を象徴し、碑を中心にした周囲は、全世界より戦争、核兵器を廃絶して世界の平和と、人類愛、人間尊重を希求し、永久に御霊の安らぎを祈念しています。 周りの赤煉瓦は防空壕入り口付近に作られた供養塚です。	6年生		○
⑩原爆のカラスサンショウの木	原爆に遭いながらも、辛うじて生き残り、現在に至っています。現在はムクの木々に支えられ、その姿を維持しています。	3年生	○	
⑪被爆クスの木(2)	原爆降下時、1本の大きな木でしたが、被爆で燃えた跡に新芽がでて2本の木になりました。		○	
⑫平和桜	被爆する以前からあった桜で、今も通学路として毎日子どもたちに親しまれています。ここは桜の木も永井博士から寄贈されたものです。 永井坂に対して昭和50年代に平和坂と命名され、現在に至っています。			○
⑬十五の桜	昭和15年度、第17回卒業生のみなさまが70歳の古希のお祝いと、昔の桜を復元したいという思いで、平成9年10月に植樹されました。			○
⑭集會室	旧校舎の跡にあり、被爆後の写真や児童の手作り のパンフレット が掲示してあります。 訪れた修学旅行生が被爆の様子について、被爆者から聞き取り 学習をする場となっています。			○

・長崎市立城山小学校編『平和に関する施設・碑 平和は城山から』（長崎市立城山小学校、編纂年不明）より作成。

間における指導過程」の4つのプロセス、すなわち「課題設定」→「課題追究」→「表現・発信」→「構築」に沿って構成されている事が分かる。中でも注目したいのは、「平和的实践力」でも重視されている「被爆体験を継承し、平和の大切さを発信できる力」である。単に「調べた事をまとめて発表する」といった単純な構成ではなく、「ピースナビゲーター」の活動を取り入れている事が分かる。例えば、3年生の「「ピースナビゲーターへのスタート」(2学期28h, 3学期18h)」や5年生の「ピースナビ『6年生との交流』(3学期18hの一部)」, 6年生「私たちのピースナビ活動を作ろう(1学期)」「平和の種まくピースナビ活動を作ろう(2学期)」等である。子ども達が、主体的に課題を追究し、そして身に付けた内容を「ピースナビゲーター」という形で他者に発信する事で、より社会参画的、より継承的な活動になっている。子ども達自身を、まさに継承の担い手として活動させているのである。

最後に、継続的な地域と遺族の支えについて取り上げたい。城山小学校の平和教育実践は、直接被爆した学校であるといった特別な状況により、当初からその校内の戦争遺跡を活用する教育実践が続けてきた。今回の研究も、広島市の「平和教育プログラム」の様に、大幅な改変と取り組みの下に展開するのではなく、基本的には従来の取り組みを活かす形で取り組まれている。しかし、そうした学習材としての戦争遺跡には、当然それに関わった地域の人々や遺族が存在する。例えば、平和発信協議会(3・5・6年生)、ピースバトンナガサキ(3年生)、長崎市被爆継承課(5年生)、さるくガイドさん(5年生)等である。こうした方々の支えがあり、各学習活動は展開されてきた。こうした方々の関わりは、従来は直接被爆体験を持つ方々が中心であったが、次第にその遺族や継承者の方々に代わってきている。すなわち、「モノ」としての戦争遺跡には変わりはないが、「ヒト」の関わりは確実に変遷してきたので

ある。

4. 結語

以上、長崎市教育委員会「3.教職員への研修」の「(4) 平和教育研究校の指定（昭和59年度より）」の事業で、2015-2016（平成27-28）年度に指定を受けた山里小学校、2014-2015（平成26-27）年度にグループ指定を受けた城山小学校を取り上げ検討してきた。改めて、「次世代の平和教育」の特色である3つの視点、すなわち「(1) 継承的アーカイブの活用」「(2) 戦後の平和希求活動への着眼」「(3) 目的地的平和教育から方法的平和教育へ」から振り返ってみたい。

まず、「(1) 継承的アーカイブの活用」について、山里小学校も城山小学校とともに爆心地に最も近い学校であり、その立地そのものの特殊な事情により、校内に豊富な戦争遺跡が存在している。先述した様に、両校とも当初からこうした“モノ”として遺された遺跡、遺物を活用した実践を展開してきた。しかし、それに関わる地域や遺族の支えについては、やはり直接的被爆体験者からその遺族や継承者へと変化を余儀なくされている。被爆遺構や平和遺構に関わる「語り」等は、まさに次世代に継承されつつあるのである。

次に、「(2) 戦後の平和希求活動への着眼」について、山里小学校の「直接的平和教育指導計画」では、既に指摘した様に第1段階の「事実の理解」においては、各学年とも原爆投下そのものへの事実認識と、その後に残された平和遺構や平和希求活動への事実認識の二重の目標設定になっていた。とりわけ、原爆投下といった事実認識のみならず、全ての学年でその後の平和希求活動を取り上げていた点には注目したい。例えば、2年生では「本校にはいくつかの平和遺構があり、本校児童や地域の人々はその遺構を大切にしている事に気づく事ができる」、3年生では「学校周辺にも多くの平和遺構がある事、それらの遺構を守り続けている人がいる事を理解する事ができる」、6年生では「平和を願う人々が様々な形で平和活動を行っている事を理解する事ができる」等である。また、第2段階の「自分の考えを持つ」においても、その対象は第1段階と同じく、被爆者当人とその後の平和希求活動にかかわった人々への二重構造になっていた。それに対し、城山小学校では被爆遺構・平和遺構に関連した内容の中で戦後の取り組みも取り上げているものの、その中心的

題材は、被爆時当時のものとなっていた。例えば、広島市の「平和教育プログラム」では、「プログラム2（小学4～6）被爆の実相や復興の過程を理解する」「単元5（5学年）広島市の復興と人びとの願い」「単元6（6学年）これからの広島」等²⁵、そして花岡事件の授業実践²⁶の様にカリキュラムや単元上に明確に位置付けられた実践と比較すると、その取り扱いはいささか重視されていないようである²⁷。

最後に「(3) 目的地的平和教育から方法的平和教育へ」について、前述した様に山里小学校では目標として「児童の平和愛好の心、国際協調の精神を育てる」とされ、やはり平和を目指す心性の育成が目指されていたが、その推進の構想図では「平和を求める心を自らの生活に生かす（行動目標）」が掲げられており、その内実は長崎市が掲げる「平和に関する資質」であった。また城山小学校では「平和的実践力」の育成が目指されていたが、その内実もやはり「平和に関する資質」の育成であった。前述した様に、長崎市の場合は1978（昭和53）年に長崎市教育委員会により制定された「平和に関する教育の基本3原則」、その後2000（平成12）年12月に改訂された「平和教育の基本3原則」に基づき平和教育の実践を続けており²⁸、両校とも基本的はこれを踏襲している。「平和に関する資質」は、「生命尊重の態度」「人と人との望ましい人間関係の在り方の理解」「社会生活についての正しい認識」「国際協調の精神」「自然と人間とのかかわりについての理解」「芸術を愛し創造しようとする精神」の6点であり、平和を実現するための支えとなる汎用的能力である。これらの項目は汎用性普遍性を有するが故に、ESDの観点やDeSeCoの提唱した「キー・コンピテンシー」、すなわち平和教育を通じての言語スキルや問題解決力、社会参画力や人間関係形成力の育成等にも関連性を持つとも考えられる。しかし、広島市の「平和教育プログラム」の場合は、明確にこうした今日の教育動向を受けての開発である事を掲げているが、長崎市の場合はそれを明示はしていない点是指摘しておきたい。

総じて、広島市の場合は新しい取り組みを打ち出したいわば“改革型”であるのに対し、長崎市の場合は継承性が際立つ“改良型”と言えよう。

¹ 2009-2011年度科学研究費補助金基盤研究 (C)「地域における戦争遺跡の複合的・総合的アーカイブと学習材としての活用」.

² 2012-2014年度科学研究費補助金基盤研究 (C)「戦争体験『語り』の継承カリキュラムの開発と学習材としての活用」.

³ 2015-2017年度科学研究費補助金基盤研究 (C)「継承的アーカイブの活用と『次世代の平和教育』の構築」.

⁴ 「次世代の平和教育」については、2014 (平成26) 年度日本社会科教育学会第64回全国研究大会 (静岡大会) 自由研究発表「教員研修における平和教育－広島市、長崎市、那覇市の取り組みを事例として－」, また論文としても同名のタイトルで秋田大学教育文化学部編集委員会編『秋田大学教育文化学部研究紀要 教育科学』第70集, (秋田大学教育文化学部, 2015年3月), 1-18頁にまとめている. その特色として、以下3点を指摘した.

(1) 継承的アーカイブの活用

(2) 戦後の平和希求活動への着眼

(3) 目的の平和教育から方法的平和教育へ

⁵ 「グループ指定」とは、市教委から指定される研究校とは違い、学校側から市教委の方に申請し、研究推進を図るものである. 長崎市教育委員会山川雅弘氏からの聞き取り (2016年9月21日) による.

⁶ 前掲註4参照. 筆者は、「平和教育プログラム」の特色として、以下の4点を指摘した.

①小・中・高・12年間の平和教育を想定し、発達段階に応じた体系的カリキュラムを構築した事.

②ある特化した時間を創設するより既定の教科を活かしたカリキュラムを構築した事.

③小・中・高に応じた「平和教育ノート」といった共通教材を作成し活用している事.

④これまでの平和教育の目標など基本的路線は踏襲しつつ、復興過程やこれからの平和など未来志向、「持続可能な社会」といった新しい視点も取り入れた事.

⁷ 長崎市立山里小学校HP (<http://www.nagasaki-city.ed.jp/yamazato-e/>), 2016年10月6日閲覧.

⁸ 長崎市立山里小学校編『平成27・28年度 長崎市教育委員会指定 平和教育 研究紀要』(長崎市立山里小学校, 2016年), 1頁.

⁹ 前掲註8, 1頁.

¹⁰ 同上.

¹¹ 1978年に長崎市教育委員会により制定された「平和に関する教育の基本三原則」で、その後2000年12月に「平和教育の基本3原則」に改定されている. 長崎市教育委員会学校教育課山川雅弘氏にも確認している. (2016年9月16日).

¹² 原文は以下の通りである. 長崎市教育委員会学校教育課山川雅弘氏提供資料 (2016年9月20日) による.

児童生徒の人格を、真に平和を希求する日本人として形成するため、平和に関する指導を通して、「生命尊重の態度」「人と人との望ましい人間関係の在り方の理解」「社会生活についての正しい認識」「国際協調の精神」「自然と人間とのかかわりについての理解」「芸術を愛し創造しようとする精神」などの平和に関する資質を啓発するものである事.

¹³ 加藤公明『考える日本史の授業 3』(地歴社, 2007年), 170-173頁.

¹⁴ 安達喜彦「子どもたちの平和認識を深めるために－平和学習と歴史教育の課題－」歴史地理教育者協議会編『歴史地理教育』第380号, (歴史地理教育者協議会, 1985年), 100-109頁参照.

¹⁵ 明示されていないが、「思考・判断・表現」を一連のものとして位置付ける改正学校教育法第30条2項を受けてのものかと推察される. 前掲註4参照.

¹⁶ 山里小学校訪問時における、吉本研二校長、久松美恵子副校長、勝木弘昭教諭からの聞き取り (2016年9月21日) による.

¹⁷ 同上の提供資料 (指導案) による.

¹⁸ 前掲註16の聞き取りによる.

¹⁹ 長崎市立城山小学校編『平和に関する施設・碑 平和は城山から』(長崎市立城山小学校, 編纂年不明), 長崎市立城山小学校編『城山小学校平和祈念館』(長崎市立城山小学校, 編纂年不明) 参照.

²⁰ 長崎市立城山小学校編『平成27年度 長崎市教育委員会 グループ指定研究 (学習指導法研究) 研究収録』(長崎市立城山小学校, 2016年), 1頁.

²¹ 1951 (昭和26) 年8月8日, 少年平和像の建立にあわせて制作された曲.

²² 長崎市立城山小学校訪問時の竹村浩明校長, 研究主任村島智子教諭からの聞き取り (2016年9月20日) による.

- ²³ 長崎市教育委員会「あじさいノート」編集委員会編『あじさいノート』（長崎市教育委員会「あじさいノート」編集委員会，2015年），25頁。
- ²⁴ 前掲註22の聞き取りによる。
- ²⁵ 拙稿「教員研修における平和教育－広島市，長崎市，那覇市の取り組みを事例として－」秋田大学教育文化学部編集委員会編『秋田大学教育文化学部研究紀要 教育科学』第70集，（秋田大学教育文化学部，2015年），13頁参照。
- ²⁶ 拙稿「花岡事件を事例とした歴史教育実践の構築－加害的側面を受け止めた地域の平和希求活動を重視して－」花岡事件60周年記念誌編集委員会編『花岡事件60周年記念誌』（花岡の地・日中不再戦友好碑をまもる会，2005年），250-269頁参照。
- ²⁷ この点は，前掲註5の長崎市教育委員会聞き取り，前掲註16の山里小学校の聞き取り，また前掲註22の城山小学校の聞き取りからも確認している。
- ²⁸ 前掲註12参照。

Summary

This study is ongoing research studies on the inheritance of war has promoted research on war-related sites are promoted from the2009 fiscal year in fiscal 2012 "talk", and by 2015 In the forth part of the study on the development of peace

education of the next generation using hierarchical archiving is working from a year.

Age of war after World War II 71 years have passed, and talk about the experience of war if 10-year-old, no longer the population total population 8%. Narrative in such a situation, a direct war experience, not by using the hierarchical archive so to speak, "peace education of the next generation, [4]" and practice should call the time people have been deployed.

Featured here especially being worked from1984 (Showa 59) year for peace education of the next generation, taking account of these present Nagasaki City Board of education by specifying peace education research school, Yamazato elementary school fiscal year2015-2016 (March 27-28), and 2014-2015 (March 26-27) We consider the Shiroyama elementary school year groups specified.

Key Words : peace education of the next generation,
Yamazato elementary school,
Shiroyama elementary school

(Received January 4, 2017)